

[2] 全体概況

試験時間 60分

大問数・解答数	大問数：6題	解答数：36問	
問題の分量（対昨年比）	○ 多い	● ほぼ同じ	○ 少ない
出題分野の変化	○ あり	● なし	
出題形式の変化	○ あり	● なし	
新傾向の問題	○ あり	● なし	
<p>総評</p> <p>全体的に大きな出題傾向の変化はなかった。設問数、図版、史料、グラフ問題も例年と変わらず。戦後史の出題が2題から4題に増え、近現代史の配点が全体の40%を超えた。ますます近現代史重視の傾向が強まった。</p> <p>文化史と、近現代の社会経済史の比重が高まったが、難易度は昨年度とほぼ同じだった。</p> <p>年代整序問題が7題から5題に減少した点と史料の本格的な読み取りが必要な設問が少なくなった点により、受験生にとって、解き易い内容になったといえるだろう。</p>			

[3] 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第1問	「明かり」と社会生活	12点	会話形式のテーマ史として良問である。「明かり」そのものが問われていてテーマは特殊に見えるが、一般的な社会経済史の問題であるので、解きやすかったのではないだろうか。
第2問	原始・古代の政治と宗教	18点	問3は古代の建造物の写真を用いた視覚能力を問う意欲的な問題であった。甲の写真は昨年平城京遷都1300年にちなんだ問題か。
第3問	中世の政治・文化・社会	18点	地図や図版を用いる意欲的な問題である。中世の地図が使用される問題は昨年度と同じである。
第4問	近世の外交・政治・社会	17点	近世の史料を用いた問題。未見史料であるが、設問には関係ない。レベルは、標準的な問題である。
第5問	金子堅太郎と近代の政治・経済	12点	金子堅太郎が取り上げられているが、解答時にその人物史に関する知識は全く必要としない。レベルは標準的である。
第6問	近現代の日本の経済・社会	23点	例年通り、近現代分野にグラフが使用された。そのグラフを参照しなくても、解答は可能である。戦後史に関する設問が2問から4問に増加した。